

王通『中説』訳注稿(一)

池田 恭 哉

解題

ここに訳注を試みるのは、隋・王通の『中説』である。筆者は最近、「王通と『中説』の受容と評価―その時代的な変遷をたどって―」⁽¹⁾(以下「前稿」と呼称)と題し、王通とその著作『中説』の受容と評価の在り方について、その時代的な変遷に沿って、些か考察を加えた。そこで専ら意を注いだのは、王通が『中説』において何を主張したのかということの分析よりも、後世において、王通と『中説』の何が、如何に着目されたのかということを知るみに出す点にあった。

さて、王通が『中説』の中で何を主張したのかという、『中説』の思想内容の分析については、すでに相当な研究の蓄積がある。そしてそこで必ず指摘されることが、王通が孔子になろうとし、『中説』が『論語』を多分に模倣しているという事実である⁽²⁾。これは『中説』を通読すれば誰しも気が付くことに属するであろう。だがそうであるからか、逆にどれ程までに『中説』が『論語』を模倣した著作なのかを、徹底的に精査した研究というのはない。どの研究も、『中説』の中に見える『論語』を模倣した例を、一二ほど挙げるに止まるのである。

そこでこの訳注稿の第一の主眼は、『中説』の中に見える、『論語』あるいは孔子に関連する言説を典拠とした表現を洗い出すことに定める。これにより、王通が如何に孔子に憧れを抱いていたかを確認するとともに

に、そこからさらに、王通が何故『中説』という著作を世に問うたのかという、王通自身の問題意識にも迫ることができるのではないか、という展望を持つ。

管見の限り、これまで『中説』全体の翻訳としては、大陸で出版されたものの二種類が存在する。一つ目は宋鋼主編『中説』⁽³⁾であるが、これには現代中国語による訳文があるのみで、注釈はない。この書の特徴として、『中説』が扱う幾つかのトピックについて、「例釈」なる短編の評論を掲示している点が挙げられる。だがその評論は、時に『中説』の内容と時代的にも内容的にも乖離するものが見受けられ、『中説』を理解する上で必要不可欠のものかは、正直に言って疑問である。

二つ目は張沛『中説訳注』⁽⁴⁾であり、張沛氏は、最近になって新たに『中説校注』⁽⁵⁾を出版している。この張氏による両著作は、前者には現代中国語による訳文とともに、簡にして要を得た注釈が附されており、後者には訳文がない分、前者より踏み込んだ注釈が多く附されている。いずれも実に依拠すべき成果であると言える。だが本訳注稿の第一の主眼から見れば、『論語』や孔子に関連する言説を典拠とする表現についての指摘は、なお不足する部分を残すようである。

日本では、内藤耻叟『文中子中説講義』⁽⁶⁾がある。これは『中説』の原文に訓点を施しただけのものであるため、解釈が不明確な部分が多いだけでなく、注釈がない点も悔やまれる。またかなり古い著作であるため、

現在では入手が困難を極める。

また市川本太郎『文中子』⁷⁾は、現代日本語訳と注釈が備わる。だが抄訳であるし、注釈も歴史的な事象については概ね指摘されるが、言葉の典拠については指摘が少ない。なおこの書の「解説」二「文中子の著書」と四「文中子の門人」には、王通の『中説』やその他の著作、および門人とされる人物についての紹介と分析がある。本訳注稿では、紙幅の都合もあって、門人については名と字などの基本情報の提示に留め、王通による数多くの現在に逸した著作の概要とともに、市川氏の書を合わせて参照されることを願う。

ところで前稿にも触れたところであるが、『中説』は南宋に入つて偽書との疑いが強く持たれるようになった一方で、司馬光・程頤・朱熹・陳亮など、宋代を通じて思想界の注目を多く浴びたと言つてよい。それは『中説』の中に、後の宋学に繋がる要素が散りばめられていたことを意味するのではないか。ここに『中説』を邦訳することで、王通『中説』と宋学の間での関係性について考える契機となればと考える。これが本訳注稿作成の第二の主眼である。

以上、本訳注稿作成の二つの主眼を述べた。第一は、「王通『中説』は『論語』を模倣しました」という簡潔な規定を示すのではなく、どれ程までに孔子と『論語』の要素を、王通と『中説』が取り込んだのかを、改めて徹底的に精査することである。第二は、『中説』の邦訳を示すことで、その中に存在する後の宋学との関連箇所を探究する契機とすることである。

本訳注稿では、底本を張沛『中説校注』とする。これは同書の凡例にもある通り、『続古逸叢書』に影印される「江安傅氏双鑑楼藏北宋刻本」を底本に、四部叢刊に影印される「常熟瞿氏鉄琴銅劍樓藏南宋取瑟堂刊本」、そして明・世徳堂刊の六子本を主たる校本としたものである。また清・兪樾『諸子平議』などの成果も広く取り入れられており、いま最も信頼の置けるテキストであると言つてよからう。なお注釈中に「張氏

書」や「張氏注」とあるのは、この書のことである。また『中説』の版本については、駱建人『文中子研究』⁸⁾の内編「著述板本考」に詳細な実見に基づいた研究があるので、合わせて参照されたい。

注釈においては、本訳注稿の第一の主眼としても言及したように、何よりも『論語』や孔子をめぐる言説を典拠とした表現について、徹底的に洗い出すことを目指した。加えて典拠とは言えなくとも、邦訳に際して参考とした語句の用例、あるいは阮逸による注釈なども、挙げた場合がある。本訳注稿に示すような邦訳になった根拠とするためである。

さらに既出の典拠、語句の用例を示す際の便宜のため、各篇において段落ごとに通し番号を振り、本文の冒頭に(一)の如く明記する。そしてある既出の典拠、語句の用例については、「某某篇(幾)注幾、参照」などと掲示する。

全体に読めない箇所が多くあり、言うまでもなく誤読も多いことであろう。また本訳注稿の第一の主眼である、『中説』が典拠とした『論語』や孔子をめぐる言説を洗い出す点において、遺漏が多いであろうことを恐れる。本訳注稿は、王道篇から始まって関朗篇まで計十回にわたって連載する予定であり、博雅の士の批正を乞う次第である。

- (1) 『東方学』第一二八輯、二〇一四。
- (2) 王通と『中説』の思想内容をめぐる先行研究は、前稿を参照。
- (3) 内蒙古人民出版社、一九九九。
- (4) 諸子訳注叢書、上海古籍出版社、二〇一。
- (5) 新編諸子集成続編、中華書局、二〇一三。
- (6) 博文館、一八九三。
- (7) 明德出版社、一九七〇。
- (8) 台湾商務印書館、一九九〇。

中説卷第一

王道篇

(一) 文中子曰、甚矣、王道難行也⁽¹⁾。吾家頃銅川⁽²⁾六世矣、未嘗不篤於斯。然亦未嘗得宜其用、退而咸有述焉⁽³⁾、則以志其道也。蓋先生⁽⁴⁾之述、曰時變論六篇。其言化俗推移之理⁽⁵⁾、竭矣。江州府君⁽⁶⁾之述、曰五經決錄五篇。其言聖賢製述之意備矣。晉陽穆公⁽⁷⁾之述、曰政大論八篇。其言帝王之道⁽⁸⁾著矣。同州府君⁽⁹⁾之述、曰政小論八篇。其言王霸之業⁽¹⁰⁾盡矣。安康獻公⁽¹¹⁾之述、曰皇極讜義九篇⁽¹²⁾。其言三才⁽¹³⁾之去就深矣。銅川府君⁽¹⁴⁾之述、曰興衰要論七篇。其言六代⁽¹⁵⁾之得失明矣。余小子獲睹成訓、勤九載矣⁽¹⁶⁾。服先人之義、稽仲尼之心、天人之事⁽¹⁷⁾、帝王之道⁽¹⁸⁾、昭昭乎。

文中子(王通)が言った「凄まじいものだ、王道の行ない難いこととは。我が王家は、最近の銅川府君(王隆)まで六世代に亘って、この王道に心寄せぬ人物はいなかった。だがそれを実用へと移し得た人物もおらず、そこで隠退して皆が著述を行なって、その王道を書き記した次第である。いったい先生(王玄則)の著述は『時變論』六篇である。その言葉の中には、風俗と教化が状況に応じて変化する道理が説き尽くされる。江州府君(王煥)の著述は『五經決錄』五篇である。その言葉の中には、聖人賢者が著述を遺した意図が備わる。晋陽穆公(王虬)の著述は『政大論』八篇である。その言葉の中には、帝王の道が明らかにされる。同州府君(王彦)の著述は『政小論』八篇である。その言葉の中には、王業と覇業について説き尽くされる。安康獻公(王仁)の著述は『皇極讜義』九篇である。その言葉の中には、三才(天地人)の廻り合わせが掘り下げられる。銅川府君の著述は『興衰要論』七篇である。その言葉の中には、六代(晋・宋・北魏・北斉・北周・隋)における得失が明らかにされる。私奴は先祖たちの教訓を目睹し得、それに勤しむこと九年に及んだ。先人の教義を服膺し、孔子の心志を考えを巡らせば、天と人の間の事柄と、帝王の道とは、何と輝かしいことであろうか」。

(1) 王道「書」洪範「無偏無黨、王道蕩蕩。無黨無偏、王道平平。無反無側、王道正直」。

(2) 銅川 銅川府君、王通父・王隆。

(3) 述「論語」述而「述而不作、信而好古、竊比於我老彭」。

(4) 先生 王通六世祖・王玄則。

(5) 化俗推移 張衡「西京賦」(『文選』卷二)「故帝者因天地以致化、兆人承上教以成俗。化俗之本、有與推移」。

(6) 江州府君 王通五世祖・王煥。

(7) 晋陽穆公 王通四世祖・王虬。

(8) 帝王之道 揚雄「劇秦美新」(『文選』卷四八)「帝王之道、兢兢乎不可離已」。

(9) 同州府君 王通三世祖・王彦。

(10) 王霸之業 『孟子』公孫丑上「孟子曰、以力假仁者霸、霸必有大國。以德行仁者王。王不待大」。

(11) 安康獻公 王通祖父・王仁。

(12) 皇極「書」洪範「天乃錫禹、洪範九疇、彝倫攸叙。……次五曰建用皇極(孔傳、皇大、極中也。凡立事、當用大中之道)」。

(13) 三才「易」説卦傳「昔者聖人之作易也、將以順性命之理。是以立天之道、曰陰與陽。立地之道、曰柔與剛。立人之道、曰仁與義。兼三才而兩之」。

(14) 銅川府君 注(2)、參照。

(15) 六代 阮逸注「六代、晉・宋・後魏・北齊・後周・隋也」。

(16) 勤九載矣 文中子世家「大業元年、一徵、又不至、辭以疾。……乃續詩・書、正禮・樂、修元經、讀易道、九年而六經大就」。

(17) 天人之事 揚雄「劇秦美新」(『文選』卷四八)「天人之事盛矣、鬼神之望允塞」。

(18) 帝王之道 注(8)、參照。

(二) 子謂董常⁽¹⁾曰、吾欲修元經⁽²⁾、稽諸史論⁽³⁾、不足徵也⁽⁴⁾、吾得皇極讜義⁽⁵⁾焉。吾欲續詩⁽⁶⁾、考諸集記⁽⁷⁾、不足徵也、吾得時變論⁽⁸⁾焉。吾欲續書⁽⁹⁾、按諸載錄⁽¹⁰⁾、不足徵也、吾得政大論⁽¹¹⁾焉。董常曰、夫子之得、蓋其志焉。子曰、然。

先生が董常に言った「私が『元経』を編もうと、歴史をめぐる評論を引き合わせてその内容を考えてみたが、編むのに不足であったところに、私は『皇極讜義』を手に入れた。私が『詩』の続編を著そうと、歴代の賢人による文集の記録の中にその内容を考察してみたが、著すのに不足であったところに、私は『時変論』を手に入れた。私が『書』の続編を著そうと、歴代史官による実録の中にその内容を調べてみたが、著すのに不足であったところに、私は『政大論』を手に入れた。董常が言った「先生が手に入れたと言われるのは、思うに著者の心志のことでありましょう。先生が言った「そうだ」。

- (1) 董常 阮逸注「董常、字履常。弟子亞聖者」。
- (2) 元経 張氏注「王通續六經之一、仿春秋而作、共五十篇、分爲十五卷、記述自晉惠帝；永熙元年至隋開皇九年三百年間國史。書早亡佚、現存宋本元経係偽書」。
- (3) 史論 阮逸注「史論、謂歷代史臣於紀傳後贊論之類是也」。
- (4) 不足徵 『論語』八佾「子曰、夏禮、吾能言之。杞不足徵也。殷禮、吾能言之。宋不足徵也（何晏集解、包曰、徵、成也）。文獻不足故也、足則吾能徵之矣」。
- (5) 皇極讜義 王通祖父・王一著、九篇。
- (6) 續詩 張氏注「王通續六經之一、凡三百六十篇、分爲十卷、收晉・宋・北魏・北齊・北周・隋六代之詩」。
- (7) 集記 阮逸注「前賢文集所記」。
- (8) 時變論 王通六世祖・王玄則著、六篇。
- (9) 續書 張氏注「王通續六經之一、凡一百五十篇、分爲二十五卷、收

錄漢・晉誥令、有皇帝之制・詔・志・策、大臣之命・訓以及事・問對・贊・議・誠・諫等」。

- (10) 載錄 阮逸注「史官載言所錄」。
- (11) 政大論 王通四世祖・王虬著、八篇。

(三) 子謂薛收⁽¹⁾曰、昔聖人述史三焉。其述書也、帝王之制備矣⁽²⁾。故索焉而皆獲。其述詩也、興衰之由顯⁽³⁾。故究焉而皆得。其述春秋也、邪正之跡明⁽⁴⁾。故考焉而皆當。此三者、同出於史、而不可雜也。故聖人分焉。先生が薛收到言った「かつて聖人（孔子）が著述した歴史には三種あった。彼が『書』を著述すると、帝王の制度が備わった。そのためこの書に当たれば、帝王の制度はすべて探し当てられる。彼が『詩』を撰述すると、王朝の興亡・盛衰の由来が顯然とした。そのためこの書を究明すれば、王朝の興亡・盛衰の由来がすべて理解できる。彼が『春秋』を撰述すると、正しいことと邪なことの現れが明らかにされた。そのためこの書を調べ考えれば、正しいことと邪なことの現れが当を得る。この三種は、どれも歴史を淵源とするが、一緒くたにしてはならない。だから聖人はこれを分けたのである」。

- (1) 薛收 阮逸注「薛收、字伯褒、隋内史道衡之子」。
- (2) 其述書也、帝王之制備矣 孔安國「尚書序」(『文選』卷四五)「先君孔子……討論墳典、斷自唐虞以下、訖於周。芟夷煩亂、翦截浮辭。舉其宏綱、撮其機要、足以垂世立教。典謨訓誥誓命之文、凡百篇。所以恢弘至道、示人主以軌範也。帝王之制、坦然明白、可舉而行」。
- (3) 其述詩也、興衰之由顯 『詩』序「是謂四始、詩之至也（鄭玄箋、始者、王道興衰之所由）」。
- (4) 其述春秋也、邪正之跡明 范甯「春秋穀梁傳序」(『春秋穀梁傳注疏』)「先王之道既弘、麟感而來應。因事備而終篇、故絕筆於斯年。成天下之事業、定天下之邪正、莫善於春秋」。

(四) 文中子曰、吾視遷・固而下⁽¹⁾、述作⁽²⁾何其紛紛乎。帝王之道⁽³⁾、其暗而不明乎⁽⁴⁾。天人之意⁽⁵⁾、其否而不交乎⁽⁶⁾。制理者⁽⁷⁾參而不⁽⁸⁾一乎。陳事者⁽⁸⁾亂而無緒乎⁽⁹⁾。

文中子が言った「私が司馬遷・班固より後を見るに、著作は何と乱れ多いことか。帝王の道は、暗然として明らかでなくなってしまうのか。天と人の間の意志は、塞がって感応し合わなくなってしまったのか。論理を打ち立てる著作は数多く不揃いであるなあ。事実を述べる著作は乱雑で端緒などあつたものでないなあ」。

- (1) 遷固 『文心雕龍』史傳「張衡司史、而惑同遷固、元帝王后、欲爲立紀、謬亦甚矣」。『中説』天地篇「子曰、使陳壽不美於史、遷・固之罪也。使范甯不盡美於春秋、歆・向之罪也。裴晞曰、何謂也。子曰、史之失、自遷・固始也、記繁而志寡。春秋之失、自歆・向始也、棄經而任傳」。
- (2) 述作 『禮記』樂記「故知禮樂之情者能作、識禮樂之文者能述。作者之謂聖、述者之謂明。明聖者、述作之謂也」。
- (3) 帝王之道 王道篇(一)注(8)、參照。
- (4) 暗而不明 『莊子』天下篇「是故內聖外王之道、闇而不明、鬱而不發。天下之人、各爲其所欲焉、以自爲方」。
- (5) 天人之意 『後漢書』楊震列傳附曾孫彪「案石包讖、宜徙都長安、以應天人之意」。
- (6) 否而不交 『易』否「象曰、天地不交、否」。
- (7) 制理 『文心雕龍』諸子「申商刀鋸以制理、鬼谷唇吻以策勳」。
- (8) 陳事 『文心雕龍』章表「劉琨勸進、張駿自序、文致耿介、並陳事之美表也」。
- (9) 從制理至緒乎 王勃「續書序」(『王子安集注』卷四)「自時以降、史述陵遲、人自爲家、標指失中。陳事亂而無當、制理參而不⁽¹⁾」。

(五) 子不豫。聞江都有變⁽¹⁾、泫然⁽²⁾而興曰、生民厭亂久矣。天其或者將啟堯・舜之運⁽³⁾、吾不與焉⁽⁴⁾。命也⁽⁵⁾。

先生が病氣になった。江都(揚州)の地で異変があつた旨を耳にし、涙ながらに起き上がって言った「人民たちが戦乱に辟易としてから長い時を経た。天がたとえ堯・舜の氣運を啓くことがあつたとしても、私はその時代に巡り合わせることはできない。運命である」。

- (1) 江都有變 阮逸注「大業十三年、煬帝幸江都宮、宇文化及弑逆」。此注疑有誤。説見于張氏書。
 - (2) 泫然 『禮記』檀弓上「孔子泫然流涕曰、吾聞之、古不脩墓」。
 - (3) 天其或者將啟堯・舜之運 『春秋左氏傳』僖公三年「叔詹諫曰、臣聞天之所啟、人弗及也。晉公子有三焉。天其或者將建諸。君其禮焉」。
 - (4) 吾不與焉 『論語』泰伯「子曰、巍巍乎。舜・禹之有天下也。而不與焉」。皇侃『論語集解義疏』子曰至與焉疏「一云、孔子歎」不預見舜・禹之時也。若逢其時、則已宣道當用。故王弼曰、逢時遇世、莫如舜・禹也。江熙曰、舜・禹受禪、有天下之極、故樂盡其善。歎不與並時、蓋感道契在昔而理屈當今也」。
 - (5) 從子不至命也 『中説』錄闕子明事「江都失守。文中寢疾、歎曰、天將啟堯・舜之運、而吾不遇焉、嗚呼」。
 - (六) 文中子曰、道之不勝時久矣。吾將若之何。董常曰、夫子自秦歸晉、宅居汾陽⁽¹⁾、然後三才五常⁽²⁾、各得其所⁽³⁾。
- 文中子が言った「道が時代の流れに対抗しきれなくなつて久しい。私はこれをどうしたらいいのか」。董常が言った「先生が秦(長安)から晉(汾陽)にお戻りになり、(故郷の)汾陽にお住まいになって、初めて三才(天地人)・五常(仁義礼智信)が、それぞれ然るべく位置づけられたのです」。

- (1) 從自秦至汾陽 阮逸注「秦長安、隋都也。晉汾陽、子鄉也」。『中說』文中子世家「仁壽三年、文中子冠矣。慨然有濟蒼生之心、西遊長安、見隋文帝。……時將有蕭牆之變、文中子知謀之不用也、作東征之歌而歸」。
- (2) 三才五常 三才、王道篇(一)注(13)、參照。五常、『漢書』董仲舒傳「夫仁誼禮知信、五常之道、王者所當脩飭也」。
- (3) 從夫子至其所 『論語』子罕「子曰、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所」。

(七) 薛收曰、敢問續書之始於漢、何也。子曰、六國之弊⁽¹⁾、亡秦之酷⁽²⁾、吾不忍聞也。又焉取皇綱乎⁽³⁾。漢之統天下也、其除殘穢、與民更始⁽⁴⁾、而興其視聽乎⁽⁵⁾。薛收曰、敢問續詩之備六代⁽⁶⁾、何也。子曰、其以仲尼三百始終於周乎⁽⁷⁾。收曰、然。子曰、余安敢望仲尼。然至興衰之際、未嘗不再三焉。故具六代始終、所以告也⁽⁸⁾。

薛收が言った「質問させて頂きますが、『統書』が漢代から開始されるのは、何故なのでしょう。先生が言った「六国(燕・魏・齊・楚・韓・趙)による弊害や、亡秦(始皇帝)による酷政は、私には聞くに堪えないものである。またどうしてそこに王道の綱紀を見出し得よう。漢王朝が天下を統一すると、邪悪で汚れた者どもを排除し、民衆とともに政治を刷新することで、民衆たちの耳目の蒙を啓いたのだ」。薛收が言った「質問させて頂きますが、『統詩』に六代(晋・宋・北魏・北齊・北周・隋)の歌謡が載録されているのは、何故なのでしょう。先生が言った「(そう問うのは)孔子の『詩』三百篇が周一代だけの歌謡に終始しているからか」。収が言った「そうです」。先生が言った「私にどうして孔子を期待できようか。だが勃興と衰退の交替については、繰り返し考えてきた。そこで六代の最初から終わりまでを載録することで、時の君主様にその風俗を伝えたのだ」。

- (1) 六國 阮逸注「六國、燕王喜・魏王假・齊王建・楚王負芻・韓王安・趙王嘉也」。
- (2) 亡秦 阮逸注「亡秦、始皇也」。
- (3) 皇綱 班固「答賓戲」(『文選』卷四五)「方今大漢、洒掃群穢、夷險芟荒、廓帝紘、恢皇綱、基隆於義農、規廣於黃唐」。
- (4) 與民更始 『漢書』武帝紀「詔曰、……其赦天下、與民更始」。
- (5) 視聽 『書』泰誓中「天視自我民視、天聽自我民聽」。
- (6) 六代 王道篇(一)注(15)、參照。
- (7) 仲尼三百 『論語』為政「子曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」、子路「子曰、誦詩三百、授之以政、不達。使於四方、不能專對。雖多、亦奚以爲」。
- (8) 告 阮逸注「告猶貢也、貢其俗於時君」。

(八) 文中子曰、天下無賞罰⁽¹⁾三百載矣⁽²⁾。元經可得⁽³⁾不興乎⁽⁴⁾。薛收曰、始於晉惠、何也。子曰、昔者明王在上⁽⁴⁾、賞罰其有差乎。元經褒貶、所以代賞罰者也、其以天下無主而賞罰不明乎。薛收曰、然則春秋之始周平魯隱、其志亦若斯乎。子曰、其然乎。而人莫之知也⁽⁵⁾。薛收曰、今乃知天下之治、聖人斯在上矣。天下之亂、聖人斯在下矣⁽⁶⁾。聖人達而賞罰行、聖人窮而褒貶作。皇極所以復建而斯文不喪也⁽⁷⁾。不其深乎⁽⁸⁾。再拜而出、以告董生。董生曰、仲尼沒而文在茲乎⁽⁹⁾。

文中子曰「天下に賞罰が存しなくなって三百年になった。『元經』が登場しないわけにはいくまい」。薛收が言った「『元經』が西晋・惠帝から始まるのは、何故なのでしょう。先生が言った「昔は聖明なる君主が上におり、賞罰に錯誤などあったらどうか。『元經』の毀誉褒貶は、賞罰の代わりになるものであり、天下に君主がおらず、賞罰が明らかでなくなってしまうから登場したのだ」。薛收が言った「それでは『春秋』が周・平王、魯・隱公から始まる、その志向するところ

も、やはりそういうことなのでしょう。先生が言った「それはそうだよ。だがそれを知る人がいないのだ」。薛収が言った「今やっとわかりました。天下が治まっている際には、聖人（周公）が上にいるのです。天下が乱れている際には、聖人（孔子）が下にいるのです。聖人の顕達の折には賞罰が遂行され、聖人の困窮の折には褒貶が著述されるのです。（『元経』により）中正の道が再び施行されてこそ、この文化が喪失しないのです。その意義は何と深いのでしょうか。（薛収は）二度拝礼して外に出、董常に（以上の会話の内容を）伝えた。董常が言った「孔子がこの世を去っても、文化はここにあるのでしょうか」。

- (1) 賞罰 『書』康王之誥「惟新陟王、畢協賞罰。戡定厥功、用敷遺後人休」。
- (2) 三百載矣 阮逸注「自晉惠帝・永平元年至隋開皇十年、凡三百載」。
- (3) 元経可得興乎 『中説』魏相篇「董常曰、夫子以續詩・續書爲朝廷禮論・樂論爲政化、贊易爲司命、元経爲賞罰。此夫子所以生也」。
- (4) 明王在上 『漢書』元帝紀「永光四年夏六月」戊寅晦、日有蝕之。詔曰、蓋聞明王在上、忠賢布職、則羣生和樂、方外蒙澤。人莫之知也 『論語』憲問「子曰、管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下、民到于今受其賜。微管仲、吾其被髮左衽矣。豈若匹夫匹婦之爲諒也、自經於溝瀆、而莫之知也」、『後漢書』應奉傳附子劭「昔召忽親死子糾之難、而孔子曰、經於溝瀆、人莫之知」。
- (5) 聖人 阮逸注「周公上、仲尼下」。
- (6) 從皇極至喪也 皇極、王道篇（二）注(12)、参照。『中説』魏相篇「文中子曰、元経常有常也。所正以道、於是乎見義。元経有變。所行有適、於是乎見權。權・義舉而皇極立。董常曰、夫子六經、皇極之能事畢矣。『論語』子罕「子畏於匡。曰、文王既没、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何」。
- (7)

- (8) 其不深乎 『中説』周公篇「子曰、先王法服、不其深乎（阮逸注、有深旨）」。
 - (9) 從仲尼至茲乎 注(7)、参照。
 - (九) 文中子曰、卓哉、周・孔之道。其神之所爲乎⁽¹⁾。順之則吉、逆之則凶。
- 文中子曰「卓越したものだなあ、周公・孔子の道とは。それは神の成し遂げたものであろうか。これに順応すれば吉であり、これに逆行すれば凶である」。

- (1) 其神之所爲乎 『易』繫辭傳上「子曰、知變化之道者、其知神之所爲乎」。

(一〇) 子述元経皇始⁽¹⁾之事、歎焉。門人未達。叔恬⁽²⁾曰、夫子之歎、蓋歎命矣。書云、天命不於常、惟歸乃有德⁽³⁾。戎狄之德、黎民懷之⁽⁴⁾、三才其捨諸⁽⁵⁾。子聞之曰、凝、爾知命哉⁽⁶⁾。

先生が『元経』の（北魏）皇始年間の事について講述し、歎声をあげた。門人たちは真意をはかりかねた。叔恬が言った「先生が歎声をあげたのは、思うに命について歎いたのであろう。『書』に「天命とは恒常的なものではなく、ただ有徳の者にのみ寄り添う」と言う。拓跋氏の有する徳に、民衆たちが心寄せて慕ったのであれば、三才（天地人）がどうしてこれを見捨てようか」。先生はこれ聞いて言った「凝よ、お前は命について理解しているな」。

- (1) 皇始 張氏注「北魏道武帝拓跋珪年號。皇始二年拓跋珪滅後燕、統一黃河以北地區、次年建都平城、今山西大同」。
- (2) 叔恬 阮逸注「王凝、字叔恬、子之弟也。爲御史、彈侯君集、爲長孫無忌所惡、出爲太原令。王氏家書稱太原府君」。

- (3) 從書云至有德「書」咸有一德曰、嗚呼、天難謀、命靡常。常厥德、保厥位。厥德匪常、九有以亡。……非天私我有商、惟天佑于一德。非商求于下民、惟民歸于一德、康誥「王曰、嗚呼、肆汝小子封、惟命不于常」、詩「大雅・文王」侯服于周、天命靡常」。
- (4) 戎狄之德、黎民懷之「書」大禹謨「皋陶邁種德、德乃降、黎民懷之」。

(5) 三才其舍諸 三才、王道篇(一)注(13)、參照。『論語』雍也「子謂仲弓曰、犁牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其舍諸」。

(6) 知命『論語』堯曰「孔子曰、不知命、無以為君子也。不知禮、無以立也。不知言、無以知人也」。

(二) 子在長安、楊素・蘇夔・李德林皆請見⁽¹⁾。子與之言、歸而有憂色⁽²⁾。門人問子、子曰、素與吾言終日⁽³⁾、言政而不及化。夔與吾言終日、言聲而不及雅⁽⁴⁾。德林與吾言終日、言文而不及理。門人曰、然則何憂。子曰、非爾所知也⁽⁵⁾。二三子⁽⁶⁾皆朝之預議者也。今言政而不及化、是天下無禮也。言聲而不及雅、是天下無樂也。言文而不及理、是天下無文也。王道從何而興乎⁽⁷⁾。吾所以憂也。門人退。子援琴鼓蕩之什⁽⁸⁾、門人皆霑襟焉⁽⁹⁾。先生が長安にいたとき、楊素・蘇夔・李德林がそろって接見を願っていた。先生は彼らと話をし、帰ってから顔に憂愁の色を帯びていた。門人が先生に問いかけると、先生は言った「楊素は私と一日語り合い、政治については話しても、教化には言及がなかった。蘇夔は私と一日語り合い、音声・音律については話しても、音楽による徳化には言及がなかった。李德林は私と一日語り合い、表面上の修辭については話しても、中身ある実理には言及がなかった」。門人が言った「それでは何を憂えているのでしょうか」。先生が言った「お前にわかることではない。彼らはみな朝廷の政治に携わっている者たちだ。(その彼らが)いま政治については話しながら、教化には言及がないのは、天下に礼が存しなくなってしまうのだ。音声・音律については話しながら、音楽による徳

化には言及がないのは、天下に樂^{がく}が存しなくなってしまうのだ。表面上の修辭については話しながら、中身ある実理には言及がないのは、天下に文化がなくなってしまうのだ。(これでは)王道は何を根柢に興隆すると言うのか。私が憂いを抱く所以である」。門人が退席した。先生が琴を引き寄せ「詩」蕩のうたを奏でると、門人たちは誰もが涙で襟を濡らした。

- (1) 楊素・蘇夔・李德林皆請見 阮逸注「楊素、字處道。煬帝時為司徒、專朝政。蘇夔、字伯尼。善鐘律、隋樂多從夔議。李德林、字公輔。佐命掌軍書、為儀同、頗自負。三人知文中子賢、來請謁見」。楊素、『隋書』列傳第一三。蘇夔、同列傳第六。李德林、同列傳第七。李德林卒時、王通僅八歲、請見之事、可疑。說見于張氏書。又請見、王道篇(二八)注(5)、參照。
- (2) 有憂色『春秋左氏傳』宣公二年「城濮之役、晉師三日穀、文公猶有憂色」。
- (3) 與吾言終日『論語』為政「子曰、吾與回言終日、不違如愚」。
- (4) 言聲而不及雅 阮逸注「知音為聲、知徳為雅」。
- (5) 非爾所知『禮記』雜記下「子貢觀於蜡。孔子曰、賜也樂乎。對曰、一國之人皆若狂、賜未知其樂也。子曰、百日之蜡、一日之澤、非爾所知也」。
- (6) 二三子 二三子、『論語』中履見、述而「子曰、二三子、以我為隱乎。吾無隱乎爾、吾無行而不與二三子者、是丘也」。『禮記』檀弓上「孔子與門人立。拱而尚右。二三子亦皆尚右。孔子曰、二三子之嗜學也。我則有姊之喪故也。二三子皆尚左」。
- (7) 王道從何而興乎 裴廷翰『樊川文集』序「文中子曰、言文而不及理、是天下無文也。王道何從而興乎」、王道篇(三一)「子曰、悠悠素餐者、天下皆是、王道從何而興乎」。
- (8) 子援琴鼓蕩之什『韓非子』十過「平公曰、善。乃召師涓、令坐師曠

之旁、援琴鼓之。『詩』大雅・蕩序「蕩、召穆公傷周室大壞也。厲王無道、天下蕩蕩、無綱紀文章。故作是詩也」。

(9) 門人皆沾襟焉 阮逸注「哀隋將亡」。

(二二) 子曰、或安而行之、或利而行之、或畏而行之。及其成功一也⁽¹⁾。稽德則遠⁽²⁾。

先生が言った「ある人は安らかなうちに道を行ない、ある人は名誉名声を求めて道を行ない、ある人は(人より劣ることを恥じて)無理に道を行なう。道を成し遂げる点では一致している。(三者の備える)徳を考えると差は大きい」。

(1) 從或安至一也 『禮記』中庸「天下之達道五、所以行之者三。……或

安而行之、或利而行之、或勉強而行之。及其成功一也(鄭玄注、利謂貪榮名也。勉強、恥不若人)」。

(2) 稽德則遠 張氏注「孟子公孫丑上、孟子曰、以力假仁者霸、霸必有
大國。以德行仁者王、王不待大。湯以七十里、文王以百里。以力服人者、非心服也、力不贍也。以德服人者、中心悅而誠服也、如七
子之服孔子也。故曰、成功一也、稽德則遠」。

(二三) 賈瓊⁽¹⁾習書、至桓榮之命⁽²⁾、曰、洋洋乎⁽³⁾、光明之業⁽⁴⁾。天實監爾、能不以揖讓終乎⁽⁵⁾。

賈瓊が『統書』を学び、「桓榮の命」の箇所まで至って言った「盛大であるなあ、(後漢)光武帝・明帝の功業は。まったく天がこれをしっかりと見ており、最後は禪讓によったのではなかったか」。

(1) 賈瓊 阮逸注「門人、未見」。張氏注「中山人、王門高弟、從王通受禮學、曾仕楊玄感」。

(2) 桓榮之命 阮逸注「續書有桓榮之命篇。榮、字春卿。漢光武太子

傳。桓榮、『後漢書』列傳第二七。

(3) 洋洋乎 『論語』泰伯「子曰、師摯之始、闕雎之亂、洋洋乎、盈耳哉」。

(4) 光明之業 阮逸注「光武・明帝」。

(5) 能不以揖讓終乎 阮逸注「初、光武立東海王強爲太子、強讓其弟陽。陽立、是謂明帝。蓋天命授陽而使榮傳之、所以終讓成美也」。『韓非子』八說「古者人寡而相親、物多而輕利易讓、故有揖讓而傳天下者。然則行揖讓、高慈惠、而道仁厚、皆推政也」。

(二四) 繁師玄將著北齊錄⁽¹⁾、以告子。子曰、無苟作也⁽²⁾。

繁師玄が『北齊錄』を著そうとして、その旨を先生に告げた。先生が言った「いい加減なものを作ってはならない」。

(1) 繁師玄將著北齊錄 阮逸注「李德林父子俱有北齊書、王邵有北齊志、師玄撮其要爲錄」。『舊唐書』格輔元傳「格輔元者、汴州浚儀人也。伯父德仁、隋剡縣丞、與同郡人齊王文學王孝逸・文林郎繁師玄・羅川郡戶曹靖君亮・司隸從事鄭祖咸・宣城縣長鄭師善・王世充中書舍人李行簡・處士盧協等八人、以辭學擅名、當時號爲陳留八俊」。

(2) 無苟作也 『論語』子路「君子於其言、無所苟而已矣」。

(二五) 越公以食經⁽¹⁾遺子、子不受。曰、羹藜含糗⁽²⁾、無所用也。答之以酒誥及洪範三德⁽³⁾。

越公(楊素)が「食經」を先生に贈ったが、先生は受け取らなかった。言うには「粗末な物を飲食している者には、無用な本だ」。(『書』の)「酒誥」、また「洪範」の三つの徳を以て返答とした。

(1) 食經 阮逸注「食經、淮南王撰、盧仁宗・崔浩亦有之」。張氏注「隋書・經籍志三・醫方類、載崔氏食經四卷、食經十四卷、梁有食經二

卷、又食經十九卷、食經三卷、馬琬撰。又大業拾遺記、隋煬帝時尚食直長謝諷、著有淮南玉食經、已亡。

- (2) 羹藜含糗 『漢書』王褒傳(又「聖主得賢臣頌」)、『文選』卷四七)「羹藜含糗者、不足與論太牢之滋味(服虔曰、哈音含。師古曰、糗即今之熬米麥所爲者)」。『論語』里仁「子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也」。

- (3) 酒誥及洪範三德 『書』酒誥題下孔傳「康叔監殷民、殷民化紂嗜酒、故以戒酒誥」。洪範「六、三德。一曰正直、二曰剛克、三曰柔克。平康正直、疆弗友剛克、變友柔克。沈潛剛克、高明柔克。惟辟作福、惟辟作威、惟辟玉食、臣無有作福作威玉食。臣之有作福作威玉食、其害于而家、凶于而國。人用側頗僻、民用僭忒」。

(二六)子曰、小人不激不勸、不見利不勸^①。
先生が言った「小人は激励されねば励み行なわず、利益を見せなければ努力をしない」。

- (1) 從子曰至不勸 『論語』述而「子曰、不憤不啟、不悱不發」、『易』繫辭傳下「子曰、小人不恥不仁、不畏不義、不見利不勸、不威不懲。小懲而大誡、此小人之福也」。『論語』里仁「子曰、君子喻於義、小人喻於利」。

(二七)靖君亮^②問辱。子曰、言不中、行不謹、辱也^③。
靖君亮が「辱」について質問した。先生が言った「発言が当を得ず、行動に慎重さや配慮が欠けている、これが「辱」である」。

- (1) 靖君亮 王道篇(一四)注(1)、参照。
(2) 從子曰至辱也 阮逸注「言行、榮辱之主也」。『易』繫辭傳上「言行、君子之樞機。樞機之發、榮辱之主也。言行、君子之所以動天地也、

可不慎乎」。『論語』憲問「君子恥其言而過其行」。

(二八)子曰、化至九變、王道其明乎^①。故樂至九變^②、而淳氣洽矣^③。裴晞^④曰、何謂也。子曰、夫樂、象成者也^⑤。象成莫大於形而流於聲、王化始終所可見也^⑥。故韶之成也、虞氏之恩被動植矣、鳥鵲之巢、可俯而窺也。鳳皇何爲而藏乎^⑦。

先生が言った「教化が九度の道への変化を遂げれば、王道は明らかになるであろうか。だから音楽は九度変化して、純正中和の気に満ち溢れる」。裴晞が言った「どういうことでしょうか」。先生が言った「そもそも音楽とは、(王者による功業の)成就を象徴したものである。成就を象徴するのに、音声として表出して流伝する以上のやり方はなく、王者による教化の一部始終が、そこに示されるのである。だから(舜帝の)韶の音楽が変奏されると、虞舜氏の恩沢は動植物を覆うようになり、鳥や鵲の巢でも、(低いところに作られるので)上から覗くことができたのだ。鳳凰が姿を隠すはすがない」。

- (1) 化至九變、王道其明乎 阮逸注「變、變於道也。孔子曰、三年有成。九成二十七年、僅必世之仁矣、故曰王道明」。『論語』子路「子曰、苟有用我者、期月而已可也。三年有成」、同「子曰、如有王者、必世而後仁(何晏集解、孔曰、三十年曰世。如有受命王者、必三十年、仁政乃成)」。『莊子』天道「古之語大道者、五變而形名可舉、九變而賞罰可言也」、『列子』天瑞「視之不見、聽之不聞、循之不得、故曰易也。易無形埒、易變而爲一、一變而爲七、七變而爲九。九變者、究也。乃復變而爲一」。

- (2) 樂至九變 『周禮』春官・大司樂「若樂九變、則人鬼可得而禮矣」。
(3) 淳氣洽矣 『禮記』樂記「樂者、天地之和也」。
(4) 裴晞 阮逸注「晞、子之舅、傳未見」。張氏注「資治通鑑・唐紀一載、唐武德元年六月、甲戌朔、以趙公世民爲尚書令……錄事參軍裴晞爲

尚書右丞、新唐書・高祖紀載、武德四年八月、深州人崔元遜殺其刺史裴晞、叛附於劉黑闥。疑卽此人。

- (5) 夫樂、象成者也 『禮記』樂記「子曰、居、吾語汝。夫樂者、象成者也。總干而山立、武王之事也。發揚蹈厲、大公之志也。武亂皆坐、周・召之治也」。

- (6) 從象成至見也 『禮記』樂記「凡音之起、由人心生也。人心之動、物使之然也。感於物而動、故形於聲（鄭玄注、形猶見也）。聲相應、故生變。變成方、謂之音。比音而樂之、及于戚羽旄、謂之樂。……凡音者、生人心者也。情動於中、故形於聲。聲成文、謂之音。是故治世之音安以樂、其政和。亂世之音怨以怒、其政乖。亡國之音哀以思、其民困。聲音之道、與政通矣」。

- (7) 從故韶至藏乎 『書』益稷「蕭韶九成、鳳皇來儀（孔傳、韶、舜樂名。言蕭見細器之備。雄曰鳳、雌曰凰。靈鳥也。儀、有容儀備。樂九奏而致鳳皇、則餘鳥獸、不待九而率舞）。夔曰、於、予擊石拊石、百獸率舞、庶尹允諧」。『荀子』哀公「哀公曰、寡人問舜冠於子、何以不言也。孔子對曰、古之王者、有務而拘領者矣、其政好生而惡殺焉。是以鳳在列樹、麟在郊野、鳥鵲之巢、可俯而窺也。君不此問而問舜冠、所以不對也」。『莊子』馬蹄「（至德之世）禽獸可係羈而遊、鳥鵲之巢、可攀援而闚」。

(一九) 子曰、封禪之費、非古也⁽¹⁾。徒以誇天下、其秦・漢之侈心乎⁽²⁾。
先生が言った「封禪のための浪費は、古くからの制度ではない。徒に（封禪によって）天下にアピールするのは、秦・漢の驕り高ぶった精神によるものであろうか」。

- (1) 封禪之費、非古也 阮逸注「費、費耗國用也。三代已前無此禮。齊桓公欲封太山、禪梁甫、管仲言、七十二君須得遠方珍貢、乃可封禪。特設詞諫止耳、非典禮所載之實」。事見于『史記』封禪書。

- (2) 從徒以至心乎 阮逸注「始皇東巡、上太山、立石封祠、下、禪梁甫、以頌秦德。漢武帝用齊人公孫卿言、封禪登仙、遂升中嶽。又上太山封土、有玉牒、使方士求神仙千數、無驗而迴。此皆誇侈以欺天下、非事天致誠之本」。兩事各見于『史記』封禪書・『漢書』郊祀志上。又『河南程氏遺書』卷一九及『困學紀聞』卷一〇・諸子、參照。

(二〇) 子曰、易樂者必多哀⁽¹⁾、輕施者必好奪⁽²⁾。
先生が言った「容易に楽しむ人間はきつと哀しみが多く、軽々しく施しをする人間はきつと略奪を好む」。

- (1) 易樂者必多哀 『淮南子』道應訓（孔子）曰、夫物盛而衰、樂極則悲、日中而移、月盈而虧、『史記』滑稽列傳・淳于髡「酒極則亂、樂極則悲、萬事盡然」。

(2) 輕施者必好奪 『老子』第三十六章「將欲奪之、必固與之、是謂微明」。
『淮南子』人間訓「事或奪之而反與之、或與之而反取之」。

(二一) 子曰、無赦之國、其刑必平⁽¹⁾。多斂之國、其財必削⁽²⁾。
先生が言った「赦免の存しない国家では、刑罰がきつと公平である。収斂の多い国家では、財用がきつと消耗される」。

- (1) 無赦之國、其刑必平 阮逸注「無幸免、則不深犯」。
(2) 多斂之國、其財必削 阮逸注「既富侈、則用益耗」。

(二二) 子曰、廉者常樂無求⁽¹⁾、貪者常憂不足⁽²⁾。
先生が言った「廉潔な人間は、いつだって欲求するところなく楽しみ、貪欲な人間は、いつだって足りないことを憂慮する」。

- (1) 廉者常樂無求 『論語』雍也「子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在

陋巷。人不堪其憂。回也、不改其樂。賢哉回也。」

- (2) 貧者常憂不足『老子』第四章「禍莫大於不知足、咎莫大於欲得、故知足之足、常足矣」、『韓非子』解老「是以不免於欲利之心、欲利之心不除、其身之憂也。……今不知足者之憂、終身不解。故曰、禍莫大於不知足」。

(二三) 子曰、杜如晦⁽¹⁾若逢其明王⁽²⁾、於萬民其猶天乎⁽³⁾。董常・房元齡・賈瓊問曰、何謂也⁽⁴⁾。子曰、春生之、夏長之、秋成之、冬斂之⁽⁵⁾。父得其爲父、子得其爲子、君得其爲君、臣得其爲臣⁽⁶⁾。萬類咸宜、百姓日用而不知者⁽⁷⁾、杜氏之任⁽⁸⁾、不謂其猶天乎。吾察之久矣。目光惚然、心神忽然。此其識時運者、憂不逢真主以然哉⁽⁹⁾。

先生が言った「杜如晦は聖明なる君主の世に生まれ合わせれば、世の民衆たちにとって天とも言える存在であろうか」。董常・房元齡・賈瓊が質問して言った「どういふことでしょうか」。先生は言った「春に芽が出、夏に生長し、秋には実りがあつて、冬には蓄えておく。父親は父親として父親らしく、子供は子供として子供らしく、君主は君主として君主らしく、臣下は臣下として臣下らしくある。万物がすべて宜しき状態にあり、人民たちは毎日その状態に身を置きながらもそれに気が付かないのであれば、杜氏（如晦）の（民衆から寄せられる）信任は、天とも言える存在だとしてよいのではないか。私は彼の様子を気に掛けてから久しい。視線は迷つたようで、精神は安定しない。これは今の時運を弁えており、真なる君主の世に生まれ合わせないでいることを憂えているからこそその態度なのである」。

- (1) 杜如晦 阮逸注「杜如晦、字克明。唐太宗時、朝政典章文物、皆杜所定」。

- (2) 逢其明王 『孔子家語』本姓解「惜乎、夫子之不逢明王、道德不加于民」。

- (3) 於萬民其猶天乎 張氏注「參見論語・泰伯、大哉堯之爲君也。巍巍乎。唯天爲大、唯堯則之。蕩蕩乎、民無能名焉。巍巍乎其有成功也、煥乎其有文章」。

- (4) 從董常至謂也 阮逸注「疑稱天太過」。

- (5) 春生之、夏長之、秋成之、冬斂之 『史記』太史公自序「乃論六家之要指曰、……夫陰陽……夫春生夏長、秋收冬藏、此天道之大經也」、

- 『越絕書』卷一三「春者、夏之父也。故春生之、夏長之、秋成而殺之、冬受而藏之」、『吳越春秋』勾踐陰謀外傳第九「十一年……春種八穀、夏長而養、秋成而聚、冬畜而藏」、『禮記』樂記「春作夏長、仁也。秋斂冬藏、義也」。

- (6) 從父得至爲臣 『論語』顏淵「齊景公問政於孔子。孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子。公曰、善哉。信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾得而食諸」。

- (7) 百姓日用而不知者 『易』繫辭傳上「百姓日用而不知、故君子之道鮮矣」。

- (8) 杜氏之任 『論語』陽貨「子張問仁於孔子。孔子曰、能行五者、於天下爲仁矣。請問之。曰、恭・寬・信・敏・惠。恭則不侮、寬則得衆、信則人任焉、敏則有功、惠則足以使人」、堯曰「寬則得衆、信則民任焉、敏則有功、公則說」。

- (9) 從此其至然哉 阮逸注「知隋運亡、又未遇太宗、所以恍忽憂也」。

- (二四) 叔恬曰、舜一歲而巡五嶽⁽¹⁾、國不費而民不勞、何也。子曰、無他道也⁽²⁾。兵衛少而徵求寡也⁽³⁾。

叔恬（王凝）が言った「舜帝は一年で五岳を巡りましたが、国財を浪費せずに民衆を勞役させなかったのは、どうしてですか」。先生が言った「他にやり方はなかったのだよ。兵士・守衛の数は少なくて賦税の徴収も多くなかったのだ」。

(1) 舜一歲而巡五嶽。『書』舜典「歲二月、東巡守、至于岱宗。柴、望秩于山川、肆覲東后。協時月正日、同律度量衡。修五禮・五玉・三帛・二生・一死贄。如五器、卒乃復。五月南巡守、至于南岳。如岱禮。八月西巡守、至于西岳。如初。十有一月朔巡守、至于北岳。如西禮。歸、格于藝祖、用特。五載一巡守、羣后四朝（孔傳、各會朝于方岳之下、凡四處、故曰四朝）。張氏注「按此則舜一歲巡四嶽、阮逸注『書稱四嶽、此言五、舉成數歟』」。

(2) 無他道也。『荀子』儒勅「聖人也者、本仁義、當是非、齊言行、不失豪釐。無它道焉、已乎行之矣」。

(3) 兵衛少而徵求寡也。張氏注「史稱、隋煬『頻出朔方、三駕遼左、旌旗萬里、徵稅百端』。『東西遊幸、靡有定居、每以供費不給、逆收數年之賦』。勞民傷財、以至於『喪身滅國』。見隋書・煬帝紀下。此處稱舜兵衛少而徵求寡、國不費而民不勞、託古以諷今也」。

(二五) 子曰、王國之有風、天子與諸侯夷乎。誰居乎。幽王之罪也。故始之以黍離、於是雅道息矣。

先生が言った「（詩）に」王國の「風」（王風）があるのは、天子が諸侯と同列ということなのか。誰の所為なのか。幽王之罪である。だから「黍離」のうたから王風を始めたのであって、そこで「雅」（小雅・大雅）の道が終息してしまった」。

(1) 誰居乎。阮逸注「居、音姬。禮記曰何居、禮記檀弓上「檀弓曰、何居。我未之前聞也（鄭玄注、居、讀爲姬姓之姬）、郊特牲「孔子曰、……二日伐鼓、何居（居、讀爲姬、語之助也。何居、怪之也）」。

(2) 幽王之罪也。『史記』周本紀「三年、幽王嬖愛褒姒。褒姒生子伯服、幽王欲廢太子。太子母申侯女、而爲后。後幽王得褒姒、愛之、欲廢申后、并去太子宜臼、以褒姒爲后、以伯服爲太子。……又廢申后、去太子也。申侯怒、與繒・西夷犬戎攻幽王。……於是諸侯乃即申侯

而共立故幽王太子宜臼、是爲平王、以奉周祀。平王立、東遷于雒邑、辟戎寇」。

(3) 從子曰至息矣。『詩』王風・黍離序「黍離、閔宗周也。周大夫行役至于宗周、過故宗廟宮室、盡爲禾黍。閔周室之顛覆、彷徨不忍去、而作是詩也（毛傳、宗周、鎬京也。謂之西周。周、王城也。謂之東周。幽王之亂、而宗周滅、平王東遷、政遂微弱、下列於諸侯。其詩不能復雅、而同於國風焉）」。

(二六) 子曰、五行不相沴、則王者可以制禮矣。四靈爲畜、則王者可以作樂矣。

先生が言った「五行（木・火・土・金・水）が互いに阻害し合わなければ、王者は礼を制定する。四靈（麟・鳳・龜・竜）を馴らし養えば、王者は楽を作成する」。

(1) 四靈爲畜。『禮記』禮運「故人者、天地之心也、五行之端也、食味別聲被色而生者也。故聖人作則、必以天地爲本、以陰陽爲端、以四時爲柄、以日星爲紀、月以爲量、鬼神以爲徒、五行以爲質、禮義以爲器、人情以爲田、四靈以爲畜。以天地爲本、故物可舉也。以陰陽爲端、故情可睹也。以四時爲柄、故事可勸也。以日星爲紀、故事可列也。月以爲量、故功有藝也。鬼神以爲徒、故事有守也。五行以爲質、故事可復也。禮義以爲器、故事行有考也。人情以爲田、故人以爲奧也。四靈以爲畜、故飲食有由也。何謂四靈。麟・鳳・龜・龍、謂之四靈。故龍以爲畜、故魚鮪不諗。鳳以爲畜、故鳥不獮。麟以爲畜、故獸不狘。龜以爲畜、故人情不失」。

(2) 制禮・作樂。『禮記』明堂位「六年、朝諸侯於明堂、制禮作樂、頒度量、而天下大服」。

(二七) 子遊孔子之廟。出而歌曰、大哉乎。君君臣臣、父父子子、兄兒

兄弟、夫夫婦婦⁽²⁾、夫子之力也。其與太極合德⁽³⁾、神道並行乎⁽⁴⁾。王孝逸⁽⁵⁾曰、夫子之道、豈少是乎。子曰、子未三復白圭乎⁽⁶⁾。天地生我、而不能鞠我。父母鞠我、而不能成我。成我者夫子也。道不啻天地父母、通於夫子、受罔極之恩⁽⁷⁾。吾子汨彘倫乎⁽⁸⁾。孝逸再拜謝之、終身不敢臧否。

先生が孔子の廟に出かけた。廟を後にして歌った「大いなることだなあ。君主は君主らしく臣下は臣下らしく、父は父らしく子は子らしく、兄は兄らしく弟は弟らしく、夫は夫らしく妻は妻らしく、（これは）先生（孔子）のお力である。太極と徳が合致し、神なる道と並び行くものだなあ」。王孝逸が言った「先生（王通）の道とて、どうしてそれに劣りましようか」。先生は言った「お前は（言葉を慎重にと戒める）『詩』白圭篇を繰り返し口にはしていないのか。天地は私を生み落とすはするが、私を育て養ってはくれない。父母は私を育て養ってはくれるが、私を完成させてはくれない。私を完成させるのは、孔子である。道はただ天地父母からのみもたらされるものではなく、わたし通は孔子から、極まりなき恩恵を蒙っているのである。お前は常なる道を掻き乱すつもりか」。孝逸は二度拝礼してこれを謝罪し、もう二度と孔子を論評しなくなつた。

- (1) 大哉乎 『孔子家語』困誓「子貢曰、大哉乎死也。君子息焉、小人休焉。大哉乎死也」。『中説』問易「李播聞而歎曰、大哉乎一也。天下皆歸焉、而不覺也」、又「文中子曰、……大哉乎。併天下之謀、兼天下之智、而理得矣。我何爲哉。恭己南面而已」。
- (2) 從君君至婦婦 王道篇（二三）注(6)、參照。『易』家人「男女正、天地之大義也。家人有嚴君焉、父母之謂也。父子子、兄弟弟、夫婦夫婦、而家道正、正家而天下定矣」。
- (3) 與太極合德 『易』繫辭傳上「是故易有太極、是生兩儀。兩儀生四象、四象生八卦」。乾「夫大人者、與天地合其徳、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶、先天而天弗違、後天而奉天時」。

- (4) 神道並行乎 『論語』憲問「闕黨童子將命。或問之曰、益者與。子曰、吾見其居於位也。見其與先生並行也。非求益者也、欲速成者也」。
- (5) 『易』觀「觀天之神道、而四時不忒。聖人以神道設教、而天下服矣」。
- (6) 王孝逸 張氏注「王孝逸、名貞、陳留人。少聰敏、善屬文詞、與繁師玄等號爲陳留八俊。開皇初爲汴州主簿、後舉秀才、授縣尉、謝病於家、爲齊王・楊暉禮遇、未幾卒。見隋書・王貞傳」。
- (7) 子未三復白圭乎 『論語』先進「南宮三復白圭（何晏集解、孔曰、詩云、白圭之玷、尚可磨也。斯言之玷、不可爲也。南容讀詩、至此三反覆之。是其心慎言也）」。
- (8) 從天地至之恩 『詩』小雅・蓼莪「父兮生我、母兮鞠我。拊我畜我、長我育我。顧我復我、出入腹我。欲報之徳、昊天罔極」。

- (7) 長我育我。顧我復我、出入腹我。欲報之徳、昊天罔極。
- (8) 彘倫 王道篇（一）注(12)、參照。

(二八) 韋鼎⁽¹⁾請見。子三見而三不語、恭恭若不足⁽²⁾。鼎出、謂門人曰、夫子得志於朝廷、有不言之化⁽³⁾、不殺之嚴矣⁽⁴⁾。

韋鼎が面会を希望した。先生は三度面会したが三度とも語らず、恭しく謙虚で、物足りないかと思うほどであった。鼎が外に出て、門人に対して言った「先生が朝廷で自身の志向を展開できれば、物を言わずに成し遂げられる教化、人を殺さずに示される威厳が行なわれよう」。

- (1) 韋鼎 張氏注「韋鼎、字超盛、杜陵人。少通脫、博涉經史、明陰陽、善相術。仕梁、起家湘東王法曹參軍、累官至中書侍郎。入陳爲黃門郎、累官至太府卿。陳亡入隋、授任上儀同三司、除光州刺史、開皇十二年後卒。見隋書・藝術傳。按、韋鼎於開皇十四年稍後卒、如有請見之事、當在此前、彼時王通不過十歲而已、尚未收徒講學、請見夫子之事決不可信」。
- (2) 若不足 『論語』鄉黨「孔子於鄉黨、恂恂如也、似不能言者（何晏集解、王曰、恂恂、溫恭之貌）」、又「其言似不足者」。『中説』事君篇

「其接長者、恭恭然如不足」。

(3) 得志於朝廷 『孟子』盡心上「古之人、得志、澤加於民、不得志、脩身見於世。窮則獨善其身、達則兼善天下」。

(4) 不言之化、不殺之嚴 『易』繫辭傳上「默而成之、不言而信、存乎德行（韓康伯注、德行、賢人之德行也。順足於內、故默而成之也。體與理會、故不言而信也）、『老子』第二章「是以聖人處無爲之事、行不言之教。萬物作而不辭、生而不有、爲而不恃、成功而弗居」、任

昉「齊竟陵文宣王行狀」（『文選』卷六〇）「舊惟淮海、今則神牧。編戶殷阜、萌俗繁滋。不言之化、若門到戶說矣」、王勃「益州夫子廟碑」（『王子安集注』卷一五）「湛無爲之迹、而衆務同并。馳不言之化、而羣方取則」。『易』繫辭傳上「古之聰明叡知、神武而不殺者夫（韓康伯注、服萬物、而不以威形也）」、『孟子』梁惠王上「（梁・襄王）卒然問曰、天下惡乎定。吾對曰、定于一。孰能一之。對曰、不嗜殺人者能一之。……今夫天下之人牧、未有不嗜殺人者也。如有不嗜殺人者、則天下之民、皆引領而望之矣」。

(5) 從韋鼎至嚴矣 『論語』八佾「儀封人請見曰、君子之至於斯也、吾未嘗不得見也。從者見之。出曰、二三子何患於喪乎。天下之無道也久矣。天將以夫子爲木鐸」。

(二九)楊素謂子曰、天子求善禦邊者。素聞惟賢知賢⁽¹⁾、敢問夫子。子曰、羊祜・陸遜⁽²⁾、仁人也、可使。素曰、已死矣、何可復使。子曰、今公能爲羊・陸之事則可、如不能、廣求何益。通聞、邇者悅、遠者來⁽³⁾。折衝樽俎可矣⁽⁴⁾、何必臨邊也。

楊素が先生に言った「天子さまが辺境をよく防衛できる人物をお求めである。私が聞くところでは、ただ賢者のみが賢者を知ることなので、先生にお尋ねするのです」。先生が言った「羊祜・陸遜は仁なる人物であり、取り上げるべきです」。素が言った「もう死んでいるのに、一体どうして彼らを取り上げるのか」。先生が言った「今あなたが羊祜

や陸遜のような事業を成せばよいのですが、もしできないのであれば、幅広く人材を求めても何の利益になりましょう。私が聞くところでは、近くの者たちが悦服すれば、遠くの者たちも思慕し寄って来るのです。宴席を設け外交交渉を行なえばいいのであって、どうして辺境の防備を整える必要などありませんよ」。

(1) 惟賢知賢 『漢書』元后傳「且唯賢知賢、君試爲朕求可以自輔者」。

(2) 羊祜・陸遜 阮逸注「祜、字叔子。晉欲平吳、以祜督荊州。祜綏懷吳人、吳之降者欲去、則聽之。遜、字伯言。爲吳大將軍、攻晉襄陽、獲生口即還之。二賢皆仁」。

(3) 邇者悅、遠者來 『論語』子路「葉公問政。子曰、近者説、遠者來」。折衝樽俎可矣 『晏子春秋』内篇雜上「晉平公欲伐齊、使范昭往觀焉。……范昭歸、以報平公曰、齊未可伐也。臣欲試其君、而晏子識之。臣欲犯其禮、而太師知之。仲尼聞、夫不出於尊俎之間、而知千里之外、其晏子之謂也。可謂折衝矣。而太師其與焉」、張協「雜詩」其七

（『文選』卷二九）「折衝樽俎間、制勝在兩楹」。

(三〇)子之家、六經畢備、朝服祭器不假⁽¹⁾。曰、三綱五常⁽²⁾、自可出也⁽³⁾。先生の家には、「六経」(易・書・詩・礼・楽・春秋)が完備されており、参朝の服と祭祀の器とは、人から借りなかつた。言うには「三綱(君臣・父子・夫婦の間での綱紀)・五常(仁義礼智信)は、自らの家に由来するものだ」。

(1) 朝服祭器不假 『禮記』曲禮下「問大夫之富。曰、有宰食力。祭器衣服不假」、王制「大夫祭器不假、祭器未成、不造燕器」、禮運「大夫具官、祭器不假。聲樂皆具、非禮也。是謂亂國」。

(2) 三綱五常 『白虎通』三綱六紀・總論綱紀「三綱者、何謂也。謂君臣・父子・夫婦也」。五常、王道篇(六)注(2)、參照。

(3) 自可出也 阮逸注「正家以正天下」。

(三一) 子曰、悠悠素餐者^①、天下皆是^②、王道從何而興乎^③。

先生が言った「のんびり気ままに功績もなく禄を食む者たち、天下を挙げてこの有り様では、王道はどうやって興隆し得ようか」。

(1) 素餐 『詩』魏風・伐檀「彼君子兮、不素餐兮(毛傳、素、空也。鄭箋云、彼君子者、斥伐檀之人、仕有功、乃肯受祿)」。

(2) 天下皆是 『論語』微子「滔滔者、天下皆是也。而誰以易之」、『史記』孔子世家「桀溺曰、悠悠者天下皆是也、而誰以易之」。

(3) 從子曰至興乎 阮逸注「隋多無功食祿」。王道篇(一一)「今言政而不及化、是天下無禮也。言聲而不及雅、是天下無樂也。言文而不及理、是天下無文也。王道從何而興乎」。

(三二) 子曰、七制之主^①、其人可以即戎矣^②。

先生が言った「後漢」七制の君主たち、彼らなら(民衆を)兵役に就かせることもできよう」。

(1) 七制之主 阮逸注「續書有七制、皆漢之賢君、立文・武之功業者、高祖・孝文・孝武・孝宣・光武・孝明・孝章、是也」、張氏注「後漢書・楊震列傳、漢靈帝・熹平二年、楊賜上書稱、陛下不顧二祖之勤止、追慕五宗之美蹤云云。其中二祖謂高祖・光武、五宗謂文帝太宗・武帝世宗・宣帝中宗・明帝顯宗・章帝肅宗。王通所謂七制之主本此」。

(2) 可以即戎矣 『論語』子路「善人教民七年、亦可以即戎矣(何晏集解、包曰、即、就也。戎、兵也。言以攻戰)」。

(三三) 董常死。子哭於寢門之外^①、拜而受弔。

董常が死んだ。先生は寢室の門の外で哭泣され、拜礼して弔問を受けた。

(1) 董常死。子哭於寢門之外 『論語』先進「顔淵死。子哭之慟。從者曰、子慟矣。曰、有慟乎。非夫人之爲慟而誰爲」。『禮記』檀弓上「伯高死於衛、赴於孔子。孔子曰、吾惡乎哭諸。兄弟吾哭諸廟。父之友吾哭諸廟門之外。師吾哭諸寢。朋友吾哭諸寢門之外。所知吾哭諸野。於野則已疏、於寢則已重」。

子哭於寢門之外 『論語』先進「顔淵死。子哭之慟。從者曰、子慟矣。曰、有慟乎。非夫人之爲慟而誰爲」。『禮記』檀弓上「伯高死於衛、赴於孔子。孔子曰、吾惡乎哭諸。兄弟吾哭諸廟。父之友吾哭諸廟門之外。師吾哭諸寢。朋友吾哭諸寢門之外。所知吾哭諸野。於野則已疏、於寢則已重」。

(三四) 裴晞問曰、衛玠稱、人有不及、可以情恕。非意相干、可以理遣^①。何如。子曰、寬矣。曰、仁乎。子曰、不知也^②。阮嗣宗與人談、則及玄遠、未嘗臧否人物^③、何如。子曰、愼矣。曰、仁乎。子曰、不知也。

裴晞が質問して言った「衛玠が言うには『自分に及ばない人がいたならば、人情として寛恕すべきだ。悪意をもって自分を中傷する人がいたならば、道理に照らして許容してやるべきだ』。これはどうですか」。先生が言った「寛容だな」。裴晞が言った「仁ですか」。先生が言った「それはどうか」。裴晞が言った「阮嗣宗(籍)が人と話し合えば、実に深遠な論理にまで説き及び、人物の良し悪しを論評することはなかったというの、どうですか」。先生が言った「愼み深いな」。裴晞が言った「仁ですか」。先生が言った「それはどうか」。

(1) 從衛玠至理遣 阮逸注「玠、字叔寶。善談玄理、有情恕、理遣之論」。

『晉書』衛玠傳「玠嘗以人有不及、可以情恕。非意相干、可以理遣。故終身不見喜愠之容」、任昉「齊竟陵文宣王行狀」(『文選』卷六〇)「人有不及、内恕諸己、非意相干、每爲理屈」。

(2) 曰、仁乎。子曰、不知也 『論語』公冶長「孟武伯問、子路仁乎。子曰、不知也(何晏集解、孔曰、仁道至大、不可全名也)」。

(3) 從阮嗣至人物 阮逸注「籍、字嗣宗。口不論人之過」。『世說新語』德行「晉文王稱、阮嗣宗至愼、每與之言、言皆玄遠、未嘗臧否人物」。

(三五)子曰、恕哉^①、凌敬^②。視人之孤猶己也^③。
先生が言った「思いやりがあるな、凌敬は。人の孤児をあたかも自分の子のように思う」。

(1) 恕哉 阮逸注「以己心爲人之心曰恕」。

(2) 凌敬 張氏注「凌敬、隋唐間人、曾爲竇建德國子祭酒。建德破趙州、執刺史張昂・邢州刺史陳君賓・大使張道源等、將戮之。凌敬進曰、夫犬各吠非其主、今鄰人堅守、力屈就擒、此乃忠確士也。若加酷害、何以勸大王之臣乎。建德盛怒曰、我至城下、猶迷不降、勞我師旅、罪何可赦。敬曰、今大王使大將軍高士興於易水抗禦羅藝、兵才至、士興卽降、大王之意復爲可不。建德悟、卽命釋之。見舊唐書・竇建德傳。凌敬之恕、由此可知矣」。

(3) 視人之孤猶己也 阮逸注「孟子曰、幼吾幼、以及人之幼、是恕也」。
『孟子』梁惠王上「老吾老、以及人之老、幼吾幼、以及人之幼、天下可運於掌(趙岐注、老猶敬也、幼猶愛也。敬我之老、亦敬人之老、愛我之幼、亦愛人之幼。推此心以惠民、天下可轉之掌上。言其易也)」。張氏注「視人之孤猶己一事不詳」。

(三二六)子曰、仁者、吾不得而見也。得見智者、斯可矣。智者、吾不得而見也。得見義者、斯可矣^①。如不得見、必也剛介乎。剛者好斷、介者殊俗^②。

先生が言った「仁なる人物に、私はお目にはかかれまい。智者にお目にかかれれば、それでよい。智者に、私はお目にはかかれまい。義なる人物にお目にかかれれば、それでよい。もしお目にかかれまいとあれば、せめても剛直で気骨ある人物(にお目にかかりたい)かな。剛直な者は決断力に富むし、気骨ある者は凡俗に与しない」。

(1) 從仁者至可矣 『論語』述而「子曰、聖人吾不得而見之矣。得見君子者、斯可矣(何晏集解、疾世無明君)。子曰、善人吾不得而見之矣。得見有恆者、斯可矣」。

(2) 從如不至殊俗 『論語』子路「子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不爲也」。

(三七) 薛收問至德要道^①。子曰、至德、其道之本乎。要道、其德之行乎^②。禮不云乎、至德爲道本^③。易不云乎^④、顯道神德行^⑤。薛收が至上の徳と肝要の道について問うた。先生が言った「至上の徳とは、いつたい道の根本であるうか。肝要の道とは、いつたい徳が行われたところであるうか。礼經に言うではないか、至上の徳を道の根本とすると。易經に言うではないか、道を明らかにして徳なる行いを神業にすると」。

(1) 至德要道 『孝經』開宗明義「子曰、先王有至德要道、以順天下、民用和睦、上下無怨」。『論語』泰伯「子曰、泰伯、其可謂至德也已矣。三以天下讓、民無得而稱焉」。

(2) 從至德至行乎 『論語』學而「君子務本、本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與」。

(3) 禮不云乎、至德爲道本 『周禮』地官・師氏「以三德教國子。一曰至德、以爲道本。二曰敏德、以爲行本(鄭玄注、德行内外之稱、在心爲德施之爲行)」。

(4) 禮不云乎、易不云乎 某經不云乎、王通多用、『中說』中有五例。王勃『王子安集』中亦屢見、計四例。

(5) 易不云乎、顯道神德行 『易』繫辭傳上「顯道(韓康伯注、顯、明也)、神德行(由神以成其用)」。

(三八)子曰、大哉神乎^①。所自出也^②。至哉易也^③。其知神之所爲乎^④。

先生が言った「偉大ななあ、神とは。(何物も)そこから生み出されるのである。この上ないものだなあ、『易』とは。神の仕事を弁えたものと言えようか」。

- (1) 大哉神乎 『易』乾「大哉乾乎。剛健中正、純粹精也」。
- (2) 所自出也 張氏注「所自出上、似當有萬物或天地萬物等字」。
- (3) 至哉易也 『易』坤「彖曰、至哉坤元、萬物資生」。
- (4) 其知神之所爲乎 『易』繫辭傳上「子曰、知變化之道者、其知神之所爲乎(韓康伯注、夫變化之道、不爲而自然。故知變化者、則知神之所爲)」。

(三九)子曰、我未見嗜義如嗜利者也⁽¹⁾。

先生が言った「私は義を特に好むこと、あたかも利を特に好むかの如くである人を見たことがない」。

- (1) 從子曰至者也 『論語』子罕(衛靈公)「子曰、吾未見好德如好色者也」。里仁「子曰、君子喻於義、小人喻於利」。

(四〇)子登雲中之城⁽¹⁾、望龍門之關⁽²⁾。曰、壯哉、山河之固⁽³⁾。賈瓊曰、既壯矣、又何加焉⁽⁴⁾。子曰、守之以道⁽⁵⁾。降而宿於禹廟、觀其碑首曰、先君獻公⁽⁶⁾之所作也、其文典以達⁽⁷⁾。

先生は雲中の城楼に上り、龍門の城闕の方を望み遣った。言うには「壮大であるなあ、山河による堅固さは」。賈瓊が言った「もう堅固であるからには、さらに何を必要としましょうか」。先生が言った「道によって守備するのだ」。下りてから禹廟に留まり、その石碑の碑首を見て言った「祖父・獻公が作られたもので、その文章は典雅であり、かつ過不足無く事の内実を伝達している」。

- (1) 雲中 張氏注「雲中、秦漢雲中郡治雲中、今內蒙古託克託東北、東漢末郡廢。北魏雲中郡治盛樂、今內蒙古和林格爾西北土城子。唐雲中郡即雲州、治定襄、後改雲中、今山西大同。此處似指龍門、今山西河津縣」。

- (2) 龍門 張氏注「即黃河禹門、位於山西河津與陝西韓城交界處」。
- (3) 壯哉、山河之固 『史記』吳起列傳「武侯浮西河而下、中流、顧而謂吳起曰、美哉乎、山河之固、此魏國之寶也。起對曰、在德不在險」。
- (4) 既壯矣、又何加焉 『論語』子路「子適衛、冉有僕。子曰、庶矣哉。冉有曰、既庶矣、又何加焉。曰、富之。曰、既富矣、又何加焉。曰、教之」。

- (5) 守之以道 『春秋左氏傳』襄公二十九年「曰、至矣哉、……處而不底(杜預注、守之以道)」、陸機「辨亡論」下(『文選』卷五三)「借使中才守之以道、善人御之有術」。

- (6) 先君獻公 王道篇(一)注(1)、參照。
- (7) 其文典以達 『論語』衛靈公「子曰、辭達而已矣(何晏集解、孔曰、凡事莫過於實、辭達則足矣、不煩文豔之辭)」。

(四一)子見劉孝標絕交論、曰、惜乎、舉任公而毀也。任公於是乎不可謂知人矣⁽¹⁾。見辯命論 曰、人道廢矣⁽²⁾。

先生は劉孝標「広絶交論」を目にして言った「惜しいなあ、任昉を称揚しておいて彼を譏つたのだ。任昉は「広絶交論」に取り上げられたために人を見る目に欠けることが露呈してしまった」。「弁命論」を目にして言った「人の道が廢れてしまった」。

- (1) 從子見至人矣 阮逸注「劉峻、字孝標。性率多毀。時任昉死、有子東里冬衣葛裘、孝標作絶交論、以譏任公之友、然又彰任公不知人耳」。劉孝標「廣絶交論」、見于『文選』卷五五。

- (2) 從見辯至廢矣 阮逸注「峻又有辯命論、言管輅才高不遇、乃謂窮達

由天、殊不由人。是不知命、廢人道也。「辯命論」、見于『文選』卷五四。

(四二)子曰、使諸葛亮而無死、禮樂其有興乎^①。

先生が言った「諸葛亮を死に至らせしめなければ、礼樂は興隆したであらうか」。

(1) 從子曰至興乎 阮逸注「孔明言、普天之下、莫非漢民。志在天下、

非蜀而已。亮未死、必可功成治定」。『三國志』蜀書・諸葛亮傳「亮

拔西縣千餘家、還于漢中(裴松之注、郭沖四事曰、……人皆賀亮、

亮顏色愀然有戚容、謝曰、普天之下、莫非漢民。國家威力未舉、使

百姓困於豺狼之吻。一夫有死、皆亮之罪。以此相賀、能不爲愧。於

是蜀人咸知亮有吞魏之志、非惟拓境而已」。『說苑』尊賢「孔子問居、

喟然而歎曰、銅鞮伯華而無死、天下其有定矣」。

(四三)子讀樂毅論^①、曰、仁哉樂毅。善藏其用^②。智哉太初。善發其蘊^③。

先生が「樂毅論」を読んで言った「仁者であるなあ樂毅は。うまくその

功用を表立たせない。智者であるなあ(樂毅論)を著した)太初(夏侯玄)

は。うまく樂毅の隠された部分を発明した」。

(1) 樂毅論 夏侯玄「樂毅論」、見于『藝文類聚』卷二二・人部六・品藻。

仁哉樂毅。善藏其用 『易』繫辭傳上「顯諸仁、藏諸用(韓康伯注、

衣服被萬物、故曰顯諸仁。日用而不知、故曰藏諸用)」。

(3) 從子讀至其蘊 阮逸注「夏侯玄、字太初、著樂毅論言、不拔卽墨及

莒二城者、其志以天下爲心、非兼併齊國而已、仁哉。夫毅不屠城、

善藏用也、智哉。美太初能發明毅之仁也」。

(四四)子讀無鬼論^①、曰、未知人、焉知鬼^②。

先生は「無鬼論」を読んで言った「まだ人間のことも理解できないのに、
どうして鬼神のことなど理解できようか」。

(1) 無鬼論 阮逸注「阮瞻作無鬼論、謂可以辯幽明。蓋不知聖人不語之
旨」。『晉書』阮瞻傳「瞻素執無鬼論、物莫能難、每自謂此理足可以

辯正幽明」。

(2) 未知人、焉知鬼 『論語』先進「季路問事鬼神。子曰、未能事人、焉
能事鬼。曰、敢問死。曰、未知生、焉知死」。